

人の妻悪霊と成りしを其の害を除きたる陰陽師の語(今昔物語集卷二
十四第二十)

今昔物語には、怪異譚、怪談も数多い。今回の話ですでてくる、死体の髪が抜け落ちず、骨が離れないでくついたりたままなのは、恨みを持って死んだ者の悪霊だとされる。今昔物語は半漢文。教科書やテキストではかな文体にしてあるだけ、ここでは送り仮名も省略、現代仮名遣いも混在だあめんごくせつ。

今昔、□□と云ふ者有けり。年来棲ける妻を去離れにけり。妻深く怨を成して歎き悲ける程に、其の思ひに病付て、月来悩て思ひ死にけり。其女、父母も無く親き者も無かりければ、死たりけるを取り隠し棄つる事も無くて、屋の内に有けるが、髪も落ちずして本の如く付たりけり。亦、其骨皆次かへりて離れざりけり。隣の人、物の迫より此れを臨て見けるに、恐怖るる事限り無し。亦、其の家の内、常に真青に光る事有けり。亦、常に物鳴りなむど有ければ、隣人も恐て逃げ迷ひけり。

而るに、其の夫此の事を聞て、半は死ぬる心地して「何にしてか此靈の難をば遁るべからむ。我を怨て思ひ死に死たる者なれば、我は必ず彼れに取られなむとす」と恐ぢ怖て、□□と云ふ陰陽師の許に行て、此事を語て、難を遁るべき事を云ければ、陰陽師の云く、「此事極て遁れ難き事にこそ侍なれ。然は有れども、此く宣ふ事也。構へ試む。但し、其の爲に極ては怖しき事なむど爲る。其れを構て念じ給へ」と云て、日の入る程に、陰陽師、彼の死人の有る家に、此の夫の男を掻具して将行ぬ。男、外にて聞つるだに、頭毛太りて怖しきに、増して其の家へ行かむ、極て怖し堪難けれども、陰陽師に偏に身を任せて行きぬ。

見れば、実に死人の髪落ちずして、骨次かへりて臥たり。背に馬に乗る様に乗せつ。然て、其の死人の髪を強く引かへさせ、「努々放つ事なかれ」と教へて、物を読懸け慎びて、「自が此に来むまでは此くて有れ。定めて怖しき事有らむとす。其れを念じて有れ」と云置て、陰陽師は出て去ぬ。男為む方無く、生たるにも非で、死人に乗て髪を捕て有り。

而る間、夜に入ぬ。「夜半に成ぬらむ」と思ふ程に、此の死人、「穴重しや」と云まに立走て云はく、「い、其奴求めて来らむ」と云て、走り出ぬ。何とも思はず遙に行く。然れども、陰陽師の教のままに髪を捕て有る程に、死人返す。本の家に来て、同じ様に臥ぬ。男、怖しなど云へば愚也。物も思へねども、念じて髪を放たずして、背に乗て有るに鶏

1 傍線は読解に役立つ

重要語。今昔物語は、平安の「かな」文体ではなく、漢文調で記述されており、漢文学習者にはよくお目にかかる文字・読みが多い。

例

其〓そ、その
此〓こ、この、かく
然〓さ、しか
彼〓か、かの、
也〓なり
云〓いう、いわく
為〓せ、し、す、する、

2 今昔物語には固有名詞をあつて埋めることを期してそのままにしてある箇所がたくさんある。

3 半分死んだような恐怖を感じ

4 なんとかしてみよう。

5 なんとか辛抱なさってください。

6 かしらの毛が硬直するほど怖い

7 しつかりにぎらせ

8 何か呪文をかけ

9 ああ、重い

10 よし、あいつを探して来よう

11 にわとりが鳴くのは夜が明けたしるし。

鳴ぬれば、死人、音も為ず成ぬ。

然る程に、夜明ぬれば、陰陽師来て云く。「今夜定めて怖しき事侍つらむ。髪放たずなりぬや」と問へば、男、放たざりつる由を答ふ。其の時に陰陽師、亦死人に物読懸け慎みて後、「今は去来いざ給へ」と云て、男を搔具して家に返ぬ。

陰陽師の云く、「今は更に恐れ給ふべからず。宣12ふ事の去り難ければ也」となむ云ける。男、泣々く陰陽師を拝しけり。其の後、男、敢あえて事無くして久く有けり。

¹² (難事だったが)おっしやる)依頼を座視できなかつたからですよ。

此れ近き事なるべし。其の人の孫、于いまに今世に有り。亦、其の陰陽師の孫も、大宿直と云ふ所に于今有なりとなむ語り伝へたるとや。